

学会ニュース

目次

・安藤隆穂 代表幹事を終えて	1
・増田 真 国際18世紀学会執行委員会報告書	2
・村田 全 話しておけばよかったこと	5
・川島慶子 Lavoisier in Perspective	8
・馬場 朗 18世紀フランス関係電子資料・情報の入門体験報告	10
・事務局より	14

代表幹事を終えて

安藤隆穂（名古屋大学）

鷲見洋一前代表幹事を引き継いで、2期4年にわたり代表幹事を務めさせていただきました。会員数が微増にとどまったように、学会の現状維持に明け暮れた4年間でしたが、いくつかの改革も試みさせていただきました。

鷲見代表幹事のご努力を引き継ぎ、学術会議に登録を申請し、これを認められたのは、学会として大きな出来事でした。

最も力を入れたのは、日韓の学会の交流でした。国際18世紀学会の中で、アジアの学会が共同で研究を進めることの意義については、大会その他で機会あるごとに述べさせていただきました。幸いにも大きなご支持をいただき、2002年の札幌大学での大会では韓国学会から報告者を派遣してもらい、「東アジアと啓蒙」という主題で共通論題をくむことができました。また、2003年5月には、水田洋会員と長尾伸一幹事の2会員が、韓国学会の春の研究集会に報告者として参加するということがありました。さらに、2003年の国際18世紀学会大会（ロサンゼルス）でも、日韓共同で、「東アジアと啓蒙」というセッションを開くことができました。この日韓交流がさらに発展し、中国学会も含め、アジアの学会による共同研究の場が一層広がっていくことを願っています。と同時に、これまでの日韓交流の進展には、とりわけ長尾幹事の奮闘によるところ多く、また、高橋博巳、寺田元一両幹事のサポートが大きかったことを報告し、感謝したいと思います。

学会誌にレフリー論文の掲載を取り入れたのも、大きな改革であったと思います。18世紀学会の性格と近年の学会誌をめぐる動向とについて議論を重ねた上で踏み切りました。この問題では、堀田誠三幹事に制度設計その他多大のお骨折りをいただきました。この制度は試行段階にありますが、今後、学会誌のコアの一つとして確立することを期待しています。

その他、事務局体制の整備など、できる限りの努力をおこないました。学会ホーム・ページを開くなど、学会の広報体制その他についても、改善をはかりました。しかし、欧文名簿

の問題など多くの課題を積み残し、次期代表幹事にお渡しすることになりました。

この4年間を支えてくださった方々に、あらためてお礼を申し上げます。鷲見前代表幹事には、引き続き幹事として、その責務以上の多大の御助力をいただきました。代表幹事が頼りないだけに、幹事の皆さん、特に名古屋在住常任幹事の皆さんのご負担は大変なものだったと思います。長尾幹事には、私と勤務先が同じこともあり、事実上、代表幹事の業務を引き受けてくださり、大変な負担をかけました。学会誌の編集という大任は、堀田幹事を中心に、寺田幹事と坂昌樹幹事に加わっていただき、引き受けていただきました。大会企画などについては、川島慶子幹事と高橋幹事にお願ひしました。高橋幹事には、日韓交流が強く意識された大会の企画のために、また日韓交流のために御奮闘いただきました。また、私の1期目には、飯野和夫会員に常任幹事として助けていただきました。私の代表幹事の時期におこなわれた学会運営活動は、これらの方々のお力によるものです。ここにあって詳しく記させていただき、感謝にかえたいと思います。

～ ・ ・ ・ ～

2003年度 国際18世紀学会執行委員会報告書

増田真（京都大学）

国際18世紀学会の執行委員会は第11回大会期間中、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）で開催された。より正確には、大会に先立つ8月3日（日）に旧委員会の最後の会合が開かれ、7日（木）に総会が、そして大会最終日の8日（金）に新委員会の第1回会合が開かれた。日本からは国際幹事の増田が参加した。

1. 旧委員会最終会合（8月3日）

ポスティリオーラ会長より挨拶と議題の紹介があった後、出席者の自己紹介、2003年9月にワルシャワで行われた執行委員会の議事録が承認された。（以上、議題1 3）

議題4としてサイモン・デーヴィス氏から書記長報告があった。デーヴィス氏は、前回ダブリン大会で選出されながら、執行委員会に1度しか参加しなかった人が2名いることに遺憾の意を表明し、執行委員会メンバーの責任を強調し、できるだけ会合に出席して自国の学会との連絡役を果たすように促した。

議題5として、会計のイェンス・ヘーゼラー氏（ドイツ）より会計報告が行われた。支出の項目では、事務局経費としてヴォルテール財団に3500ポンド（4900ユーロ）支払われたほか、国際学会名簿経費として3000ポンド、オンライン名簿準備経費（データ収集等のため）として3000ポンドが支払われた。また、電子投票経費として2000ポンド支払われたほか、ロサンゼルス大会への資金援助として11297ポンド（15815ユーロ）が支払われた。その結果、本会計年度（2002年8月1日 2003年7月15日）の赤字は当初予想の44335ポンドを下回る28347ポンド（39685ユーロ）にとどまったが、それは主として名簿の郵送費がまだ支払われていないことによる。累計としては、本会系年度末に48466.76ポンドの黒字となる。次年度（2003年8月1日 2004年7月31日）には各国学会からの拠出金の値上げ等により17950.00ポンドの収入が見込まれ、次年度末での累積黒字は41427.76ポンドになる予定である。なお、

印刷媒体としての国際学会名簿は今回限りで廃止されるのでその経費も今回が最後であること、次回大会までの3年間に大会やセミナーのための経費として23000ポンド蓄える必要があることなども報告された。ヘーゼラー氏によれば、この4年間は全体として国際18世紀学会にとって移行期であった、との総括が示された。その主要な点は、名簿が印刷媒体から電子媒体に変わり、投票も情報化されたこと、大会や若手セミナーへの資金援助が増大したことなどである。今まで経費のかなりの部分を占めていた印刷された名簿が廃止されることにより、経費の軽減が可能となり、ほかの活動に利用できるようになることが期待される。

議題6として、ヴォルテール財団のジャネット・ゴッデン氏から事務局報告があった。その内容は(1)国際学会名簿について、(2)執行委員会選挙について、(3)拠出金について、(4)ロサンゼルス大会についてであり、国際学会名簿ができあがったこと、選挙に電子投票が導入されたことなどが報告された。

議題7はバイロン・ウェルズ氏(米)による資金調達委員会の報告で、国際学会は運営経費の2倍に当たる備蓄を常に備えるべきである、との見解が示された。(会計のヘーゼラー氏から、それは可能であるとの解答があった。)

議題8はロサンゼルス大会についてで、およそ1100人の参加者が見込まれていること、資金援助の申し込みが152件あり、そのうちの58件が採択された、との報告があった。

議題9として選挙管理委員長のアンソニー・ストラグネル氏(英)から執行委員会の選挙について報告があり、新会長のジャン・モンド氏(フランス)をはじめとする当選者が発表された。(開票は去る7月7日と8日にオクスフォードのヴォルテール財団で行われた。当選者は後日、国際学会のホームページに掲載される予定なので詳細はそちらを参照されたい。)ストラグネル氏によれば、投票参加者の飛躍的な増大(前回の500人あまりに対して今回はおよそ1000人)に見られるように、電子投票の導入は成功であった。執行委員の任期について一部の学会員から疑義が提起された件については、会長から補足説明があり、「執行委員の任期は12年を超えることはできないという規定」(学会会則第6条)は前回ダブリン大会で選任された委員から適用され、今回の選挙は正統性に問題はないとの見解が示された。

議題10は若手セミナーについてで、2005年夏にチェコのブルノで開催されることが決まった。

議題11は総会についてで、ロサンゼルス大会期間中の7日(木)に行われることが通知された。

議題12は2007年のモンプリエ大会についてで、クロード・ロリオル氏から準備の進捗状況の報告があった。期間は2007年7月7日から14日までで、テーマは「18世紀における科学と技術」である。(前回の報告に書いたように、この「科学」は非常に広い意味に解釈することが可能で、むしろ諸学問一般という意味で使われている。つまり、研究発表やラウンドテーブルのテーマとしては、科学史、自然科学、技術工芸だけでなく、あらゆる分野、問題を扱うことができる、とのことである。)

議題13は執行委員会の会合についてで、2004年度はポルトガルのリスボンで9月23日から26日まで行われる。

議題14はチャンピオン社の「国際18世紀研究」叢書についてで、ヨヘン・シュローバハ氏(ドイツ)から刊行状況について報告があった。

最後に、新執行委員会が検討すべき問題がいくつか挙げられ、中でも、選挙や任期に関する規定の再検討と明確化の必要性が指摘された。

II. 総会(8月7日)

議題 1 として現会長からの挨拶と会務報告があり、ロサンゼルス大会の準備に当たったアメリカ18世紀学会と、過去3年間の執行委員会を受け入れた国々に対して謝辞が述べられた。最近の18世紀研究の活況が顧みられたのち、ルネ・ポモー氏とジョージ・メイ氏に黙祷がさげられた。

議題 2 として、前回ダブリン大会の総会議事録が全会一致で承認された。

議題 3 として、書記長報告があり、過去数年間について全体的な会務報告がなされた。

議題 4 として会計報告がなされ、国際学会の財政状態等が報告された。(内容はほぼ上記執行委員会の際の報告の要約。)

議題 5 として国際学会への新規加入についてで、フィンランド18世紀学会は2001年ウィーンでの執行委員会で加入が承認されているので、国際学会の新メンバーとして正式に承認された。

議題 6 は執行委員会選挙についてで、結果が発表されたほか、任期に関する規定の解釈等について討議が行われた。その中で、会場から次の2つの動議が提出された。(1)次回選挙からは、執行委員会の被選出メンバーとしての各候補者の在任年数を候補者リストに明記すること、(2)次回選挙には執行委員として8年以上在任した会員には立候補する資格を認めないこと。討議と挙手による投票の結果、(1)は承認されたが、(2)は棄却された。その後、新会長のモンド氏から就任の挨拶があった。

議題 7 は2007年のモンプリエ大会についてで、組織委員長のクロード・ロリオル氏から期間や概要の紹介があった。

III. 新執行委員会第1回会合(8月8日)

議題 1 は新会長ジャン・モンド氏による挨拶と議題の紹介。

議題 2 は新執行委員会のメンバーの自己紹介。

議題 3 として、執行委員の補充が行われた。会則第6条により、選挙によって選任された執行委員のほかに、執行委員会の選任によって執行委員を2名まで追加任命することができる。この会合では、ロサンゼルス大会の組織委員長のピーター・ライル氏と増田が推薦され、選任された。

議題 4 として、去る8月3日の会合の議事録が承認された。

議題 5 は国際学会の全体的な状況の検討であり、まず5aとして旧執行委員会の会計のヘーゼラー氏(任期は2003年12月31日まで)より説明があった。その中で、通貨の弱い諸国の拠出金の問題や、拠出金の払い込みもなく活動状況の不明な学会がいくつかあることなどが指摘された。そのような問題に対処するために、新たに会計担当となったリュゼブリンク氏が同時に各国学会との連絡役をも担当することとなった。また、今回のロサンゼルス大会で支払われるはずだった援助のうち、6000~7000ドル分が申請者の欠席などの事情で支払われずに残ったことが紹介され、検討の結果、その金額は2007年モンプリエ大会の際の支援給費の一部として使用されることになった。

5bは国際学会の法人登録(incorporation)の問題で、引き続き検討することとなり、今までの委員会が再任された。

議題 6 は事務局からの報告で、新しい名簿が9月はじめには会員に発送される予定であることが紹介された。事務局(ヴォルテール財団)から国際学会のいっそうの資金参加の要請があったことを受けて、書記補佐のレッドベリー氏が執行委員会と事務局の間の連絡役を務めることになった。

議題 7 は会則と内規についてで、より正確さと一貫性をもたせるために条項が再検討され

ることになった。そのための小委員会が創設され、ポスティリオーラ前会長、バイロン・ウェルズ氏、および増田が選任された。

議題 8 では若手セミナーが2004年にはスイスのフライブルクで、2005年にはチェコのブルノで開催されることになった。

議題 9 は今後の執行委員会の開催地についてで、2004年はポルトガルのリスボンで9月23日から26日まで、2005年はドイツのハレで9月後半に行われることになった。

議題10では将来の新たな活動を検討する小委員会の設立が新会長の発案で承認され、マルティナ・グレチェンコーワ、アンナ・クルヴァヴィッツ、アルベルト・ポスティリオーラの各氏が選任された。

議題11として、次回2007年に行われる予定の執行委員会選挙に向けて、候補者選定委員会が来年リスボンで開催される執行委員会で設立されることが確認された。

~ . ~ . ~

話しておけばよかったこと

村田 全

1

日本に十八世紀学会ができて何年になるのか、僕はその創立以来の会員である。その間、一度か二度例会で話したこともあるが、熱心な会員ではなかった。創立当時は、いわゆる理科系の人間が極めて少数 - ことによると僕一人? - だった。或る年の懇親会の席で知らない人から「いつ止められるかと見ているのですが。まだおられますね」と言われたことまである。年齢的にそろそろ引退を考える頃になって、もう少し積極的に活動すれば良かったかなと、多少の心残りを感じている。

十八世紀一般に関する学問があり得るか、これはなかなかの問題である。難しいことは言わないが、その学会が今日まで発展できたのは、西欧十八世紀の芸術、特に音楽史と、同じく文学や経済学の研究者の力に負うところが大きい。しかし勿論「十八世紀に関する学」の対象がこれだけではないわけで、早い話が数学や自然科学への視野は欠けている。それが僕の本래の専門領域だからというのではなく、もし人類史における十八世紀の意義を問うようなことになれば、理科系の分野が人文、社会系の学芸と同等の重さを持って考慮されるべきであることに疑問の余地はない。

尤も、この望みが特に現在の日本で叶えにくいには理由がある。先ずこの国の数学史や科学史の陣容はまだそれには手薄である。最近そこに若い俊秀が現れ始めてもいるのだが、その蓄積が実を結ぶのはやはりもう少し後であろう。これに加えて、これは必ずしも日本に限らないし日本にも例外のあることだが、文科系の人びとに多い理科系コンプレックスと、それと裏腹な数学や自然科学に対する誤解あるいは過信も理由の一つになろう。少なくとも十八世紀の場合、学問の細分化も自然科学の巨大化もまださほど進んでおらず、数学や物理学でもアマチュア学者が十分活躍できたし、物理学では、数学に近い先験的な rational mechanics (理論力学) と経験的な proper physics (光学、電磁気学など) が区別されて、

全体として自然哲学(natural philosophy)の名が残っていた程である。これだけで、それが哲学の一種だったとは言えないが、理科系の学問と文科系の学問との境は今ほど明確ではなかったのである。実は、数学と物理学をはじめとする自然科学とを「理科系」と括るのも大いに問題で(数学は演繹を基調とする先験性の強い学問、自然科学は本来的に帰納に基づく経験的学問だが、主流は自然の中に数学的機序を求める)、このことはこの学会の会員諸氏に対しても、もっと強調しておくべきかもしれない。ともかく文科、理科の差を現代流に捉えて十八世紀の文化を考へてはいけないのである。(なお 拙著『数学と哲学との間』(1998、玉川大学出版部)所収、「パスカル私記」を参照されたい。)

学会の初期の頃、これ以上に僕が気にしていたのは東洋ないし日本の十八世紀研究の手薄さである。この点は現在かなりよくなったので取り立てて言うことではないかもしれないが、敢えて言うと、従来の日本文化研究者の場合、その分野だけに閉じこもって、西洋はもとより東洋の文化にもあまり目を向けない人がかなりあったのではないか。余談の個人的感想だが、江戸時代の漢詩についての高橋博巳氏の近業には教えられるところが多く、最近は朝鮮との関連まで視野を広げられているようで心強い。

一方、欲張るようだが、学会が充実してくると共に、古き良き頃の雰囲気は少しずつ失われて来るように思うのは僕一個の懐古趣味であろうか。実際、発足当時のこの学会には、例えば十八世紀当時のフランスにあったらしい知的サロンの雰囲気が見られたが、それは次第に地を払いつつあるような気がする。その頃はこの学会で論文を読んでも別に業績にならないと人びとが悟っていたような処があり、講演の中には好きなことを喋りながら、専門外でも好奇心ある人びとには興味をひくものがあつたように記憶する。

尤も、今はいよいよ世知辛くなり、更に学問の何たるかを知らぬ政治家連が、学問と言えど物質科学と思ひこみ、歴史や思想は無用の長物と断ずる風潮がはびこっていて、若い人びとは古き良き時代と言ってもぴんとこないか、むしろ反感を感じずるかもしれない。僕のこのコメントなどもその人達にとっては、運よく世間を渡りおおせた老人の、例の‘昔は良かった’式のものに聞こえるかもしれない。しかし強運にも今日まで生き延びられた人間として僕の言いたいのは、どんな時代にも運の良し悪しは人力の及ばぬ処だという諦観の上で、有能な若い人びとがこの学会であれ何であれ、本当の業績を積み重ねて人類の智慧の世界に新しいものを付け加えていただきたいということである。

2

そこで改めて、この学会で自分がもっと積極的だったら良かったという悔いについて語ろう。僕は世間では数学屋ないし数学史家で通っているらしいが、数学者仲間ではしばしば‘おまえは間違つて数学をやつた’と言われたし、数学史論に対しても‘これは史論ではなく詩論だな’と言われたりもした。詩と言へるほど高級かどうかは知らないが、自分でも、省みて数学や数学史に託して自らの詩心を吐露しているかと思うことさえある。

僕は子供の頃から文学も好き物理も好きという、よく言えばマルチ人間の卵、有り体は腰の定まらぬ浮気者だった。もう一回り大きければ、やや真つ当なこともできたのだろうがと、悔恨を込めて書く。小学六年の頃の僕は、菊池寛の『第二の接吻』や久米正雄の『破船』等

にこっそり胸を躍らせる一方、祖父の書齋から『唐詩選』を持ち出して拾い読みして喜んでいた。(事実、李益の「従軍北征」などは子供でも読めるものである。) そうかと思うと、中学に入った頃からは鉱石ラジオを覚えて無線に夢中になって微積分の独習を試みたり、寺田寅彦の随筆を読んで将来は物理学をやろうと考えたり、また吉田洋一の『零の発見』でゼノンの逆理に巡り逢い、それに闘志に似た気持ちをかき立てられたりもした。数学科へ進んだのはこの方向でのことで、その名残は今も(“連続性の問題 - 数学的、自然科学的、形而上学的 - ”を完成するという)最後の妄執に繋がっている。しかしその一方、中学の四年生頃から芥川龍之介にのめり込みはじめ、中学の文芸誌に「芥川龍之介の弱さについて」という文章まで書いた。ボードレールやストリントベリー、そして芭蕉に導いてくれたのは芥川である。以上はゆめゆめ自慢話ではない。それもこれも結局はものにならず、挙げ句の果てが数学者のなりそこねという凄然たる想いである。

3

さて僕がこの学会で一度話したかったのはこのような述懐ではなく、その頃から細々続けている蕉門俳諧のことである。僕が俳諧を知ったのもやはり同じ頃のこと、たまたま或る雑誌で新年の遊びとして蕪村の歌仙に出会ったのが切っ掛けである。はじめは法式など知らぬまま、勝手に規則を作って遊んでいたが、その内、額原退蔵の「日本古典読本」の『芭蕉』(1939)や幸田露伴の『評釈炭俵』を読んで俄然面白くなった。折良く寺田寅彦の「連句雑俎」に巡り逢い、それで何か目が開けた心地がして、我流の独吟を試み始めた。中学五年から旧制高校の浪人時代のことである。北大予科から理学部に入って後もその傾向は止まず、それは、パリ在住時代(1972-74)と桃山学院文学部時代(1989-94)と共に、僕の生涯で一番、俳句、俳諧に親しんだ時代である。

一度話したかったというのは一言で言えば芭蕉の文芸における飛躍のことである。この飛躍には二つの意味がある。一つは、生涯にわたる「風雅のまこと」探求の途上で、彼が果たした数度にわたる飛躍であり、今一つは、晩年の付け句における高い飛躍である。

彼は若年、俳諧を北村季吟に学び、江戸に出て後、談林派の新しい旗手として才を認められ(『貝おほひ』)、其角、嵐雪などを擁して『桃青門弟独吟二十歌仙』を世に問うて一派を確立したが、更に火災や旅の辛酸を越えて、『冬の日』に始まる「芭蕉七部集」を残した。この間の作風の変化は、一旦確立した道を自ら否定して新しい道を拓き、既成観念を捨てて新しい価値の発見を試みるという積極的な姿勢である。価値の発見というのは、貞徳派の「物付け」や談林派の「心付け」から、「さび、しおり」、つまり匂い、響き、悌などの余情を重んずる蕉風独特の付け句に移行し(『冬の日』)、それが一通り確立するや(『猿蓑』)、今度は古典的風雅の境地に近づき過ぎたことを自覚してか、再び転じて市井の生活の中に戻り「軽み」の強調に移る(『炭俵』)、といった動きをさす。(後の川柳への流れなども、このような角度から再考して良いと思う。)ともかく僕はこの芭蕉の飛躍の中に超一流の数学者、科学者の想念の飛躍と相通ずるものを見るのである。

付け句における飛躍もこれと同種同根である。事実、七部集の多数の歌仙の内、芭蕉の付け味は他と隔絶していて、巻全体の面白さが明らかに違う。民謡、会津磐梯山に「又シが歌えば踊りも冴える、櫓太鼓の音も冴える」という一節があるが、芭蕉は正に歌仙における又

シである。このヌシに匹敵する捌き手は七部集では『炭俵』における嵐雪の「三吟」（利牛、野坡との三吟）と其角の「俳諧秋之部」（孤屋との対吟）等、ほんの少数と思われる。俳句だけならばともかく、俳諧における芭蕉は正に古今独歩であろう。俳句では芭蕉に拮抗するかに見える蕪村でも、俳諧ではそこまでは行っていない。

蕉門の付け味の機微ないしからくりを知った発端は、上記の寺田寅彦「連句雑俎」である。僕はその後『去来抄』、『三冊子』等、いくつかの書物でこの飛躍の本質に触れようとしたが、最も卓抜で、かつ実践に当たっても示唆に富むと思われたのはその論文であった。実際、折に触れて試みた我流の独吟で付け句の指針にしたのは、芭蕉を中心に巻かれた二十余りの歌仙の記憶と、後は寺田の洞察であった。

敢えて言うと、このごろ連句の解説が多くなってきた割に、あまり寺田のことが出てこないのを、僕はいぶかしく思っている。管見の範囲でそれに触れているのは能勢朝次『連句芸術の性格』に止まるが、これは僕の知識の偏りのせいではないと思う。もし専門家の見落としならば、一度、検討していただいてその評価を訊きたいと思う。

寺田は弟子達の前で「連句雑俎」だか「俳諧の本質的概論」だかを挙げて、「これは文学博士の学位論文にしても良い」と気炎を上げたという話だが、その主題の射程はただの俳諧論に止まらず、文化比較の問題にも触れる壮大なものである。そして実はこのような広くかつ深い問題意識と攻究こそ、人文系、社会系、理科系の別なく、この学会に集結する未来ある若い学者諸氏に僕が期待することである。そして（理科系の学問では今や普通のことだが）国内向けの論文で能事終われりとするのではなく、世界に向かって発進できるような仕事を積み重ねていただきたいと思う。自分のできなかつたことを人に勤めるようで少々後ろめたいが、これが僕の最後に言いたかつたことである。

(2003/IX/24)

~ . ~ . ~ . ~

Lavoisier in Perspective

川島慶子（名古屋工業大学）

この9月12、13日の両日、ミュンヘンにあるドイツ国立博物館（Deutsches Museum）の名誉の間（Hall of Fame）において“Lavoisier in Perspective”と題された国際シンポジウムが開催された。これは同博物館開館100周年を祝ってなされた一連の行事のひとつである。加えて今年ドイツ教育科学省の定めた「化学の年」にあたることから、特に「化学革命の父」と呼ばれたラヴワジェがシンポジウムのメインテーマに選ばれたものである。ドイツを代表する博物館が、このような行事のメインテーマとしてフランス人化学者をとりあげたということは（ドイツは有名な化学者にことかかない）、まことに画期的な選択である。さらに実質上のオーガナイザーはイタリア人の若手ラヴワジェ研究者マルコ・ベレッタ（Marco Beretta）であり、彼は6カ国12人の現役研究者のみを参加者として選択し、それぞれがラヴワジェに関する自身の現在の研究を、歴史、科学、哲学、経済、ジェンダーなど様々な視点

から英語で発表するという形式をとったので（つまり、レセプションの招待講演以外は、一線を遠のいたご老体の昔話などというものはひとつもなかったのである）、本シンポジウムは真に国際的かつ学際的な集まりで、単なる行事におわらない価値のあるものであった。

挨拶などを除いたプログラムは以下のようなものである。

第一部：科学における理論的実験

- 1) バンディネリ（イタリア）「ラヴワジェとラプラスの『熱について』の新しい考察」
- 2) ヘーリング（ドイツ）「18世紀の実験器具の復元による、ラヴワジェとラプラスの熱の計量実験の再演」
- 3) プリンツ（ドイツ）「ラヴワジェの呼吸実験の方法」
- 4) レーバー（カナダ）「ラヴワジェの気体計量計」

第二部：理論の多面性とその直接的印象

- 5) ポワリエ（フランス）「ラヴワジェによる貸借対照表的方法の化学への応用」
- 6) 川島（日本）「ラヴワジェ夫人の化学革命への参加」
- 7) アップリ（イタリア）「ラヴワジェと北方ヨーロッパの化学」
- 8) ノルドマン（ドイツ）「ラヴワジェとリヒテンベルクの啓蒙概念」

第三部：化学革命とその歴史的イメージ

- 9) プレ（フランス）「ラヴワジェとアカデミックな世界」
- 10) マイネル（ドイツ）「ドイツにおけるラヴワジェ」
- 11) キム（韓国）「ラヴワジェは化学革命の父なのか」
- 12) ベレッタ（イタリア）「パノプティコン・ラヴワジェの活用方法」

以上でおわかりのように、ここではテーマも幅広く、グループ分けも実によく吟味されている。立派なホールでなされるこのようなシンポジウムは、先にも述べたように、たいていお偉方の昔話（たとえそれが研究に関したことで、もう古びてしまった理論）が混じることが多いのだが、それを一切廃したこの構成は、くりかえしになるが大胆かつ画期的なものだったと思う。従ってメンバーの年齢構成もさまざまで、大御所研究者（もちろん現在でも一線で活躍している）から、ポストのない若手研究者までまじっている。もうひとつの画期的な点は、ラヴワジェでシンポジウムをすると、フランス人とアメリカ人でメンバーのほとんどを占めるのが一般的で、発表ではアメリカ英語が飛び交い、そこでフランス人がフランス語に固執することになるのだが、プログラムを見るとおわかりのように、英語圏からの参加者はカナダ人ただ一人で、あとは全部自国語でない英語での発表なのである。実は韓国人のキムが現職はアメリカの大学教授なので、アメリカからの参加と言えなくもないが、いわゆるネイティブではない。その意味では言語的にまず平等なハンディ（筆者は英語が得意でないのだからかなりきつかったが、それは筆者の勉強不足というだけのことで）で、みなに参加できたと思う。また、テーマが18世紀に関するものなので（一部19世紀にかかるものもあったが）メンバーの中には当然それぞれの国で18世紀学会に所属している者もあり、その意味で筆者にとって非常に親近感のある集まりでもあった。

発表の内容を詳しく説明しているスペースがないが、他の分野の研究にも役に立つものをひとつだけ紹介する。オーガナイザーでもあるベレッタの作成したホームページであるパノ

プティコン・ラヴワジェ (Panopticon Lavoisier : イタリアのyahooなどで、これを検索すると出てくる)は素晴らしいページで、世界中の図書館にあるラヴワジェ関係の膨大な資料(もちろん筆者の研究対象でもあるラヴワジェ夫人の資料も)が検索できる。ここにはまるで『百科全書』のように、項目相互間の対照リストもついており、ものによっては画面上で直接マニュスクリプト、18世紀に出版された本を全ページ参照し、印刷することもできる。日本のような、欧米のどこに行くにも遠い、しかも時差の大きい国に住んでいる研究者にとって、このページは非常にありがたい。その上、見るのは無料である。かつてはマニュスクリプトにたどりつくのは、研究の能力とはまた別の能力を要する至難の業であったが、こうして自宅にいて、いつでも貴重な資料に(しかもそれを汚す心配など一切せずに)接することができるのは研究者にとって大きな喜びである。

また、レセプションにおいて、当時のグラスハーモニカの演奏で18世紀の音楽を聞くという特別コンサートも企画され、その神秘的な音色に出席者一同うっとりとしたのであった。こんな音を聞きつつメスマルの治療をうけたら、なんだか病気が治るかもしれないなど思ってしまった。

シンポジウムの内容とは関係ないが、14年ぶりにおとずれたミュンヘンはやはり美しい町であった。酷暑のヨーロッパという話と打って変わってずいぶん寒かったが(7度-17度くらい)、シンポジスト一同、街中のビアレストランでグルメな宴会をして大満足であった。

~ . ~ . ~

18世紀フランス関係電子資料・情報の入門体験報告

馬場 朗(群馬県立女子大学)

18世紀フランス関係の電子資料・情報についての具体的な記事をここで書くことが学会事務局から課せられた仕事である。そもそも筆者は、元来の機械音痴で、論文執筆や資料収集のためにパソコンのワープロやデータベースをやっとの思いで使う程度の研究者である。ちなみに、マック以外のOSが載っているパソコンは使用したことがないし、5年ほど前に留学から帰って以来、旅行も含め向こうを訪れることもなく海外情報の直接仕入れを怠っている状況である。また、日本にいながら、ネット上におそらくは氾濫している18世紀フランス関係の情報についても、別段こまめにチェックする程こだわっているわけでもない。その様な怠惰な研究者である筆者にこのような記事を書くようにと要請した学会事務局の方針は、明らかであると思われる。網羅的かつ総合的な正確な情報には、遙かにより適任の会員がおられるであろう(例えば、2のa)で後述した名古屋大学の飯野氏のホームページなどを参照のこと)。むしろ、筆者に期待されているのは、おそらくは他にも少数者ながらいると思われるこの方面に疎い18世紀フランス研究者の視点からの、これら電子資料・情報の入門的な体験談であろう。確かに、筆者が少し調べただけでも、整備されつつあるこれらの資料と情報には、格別な電子機器の知識が必ずしも必要とされないばかりか、何よりも大きな魅力と利点があるのが了解できる。

1、電子書籍について

筆者の乏しい知識から勝手に判断させて戴くと、これには二つのタイプがあると思われる。a)一つ目はCDもしくはDVDで供給され個人で使うもの、b)二つ目はネット上で無料で公開もしくは使用料を払って参照できるものである。

a)このでの電子書籍は、90年代半ばに筆者が留学していた頃には、マック対応のものは殆どなかったし、学生の身分には余りに高価で全くの高嶺の花であった。ところが今や、既に何年も前に日本でも新宿のフランス図書で簡単にそして割と安価に手に入れることができるようになった。例えば、少なからぬ研究者が既に使っておられるであろう、Redon社のCDによる辞典集やディドロらの『百科全書』がある。これらのお陰で、あの馬鹿でかいフルチエールの辞典やアカデミーの辞典そして何よりも『百科全書』がどこでも簡便に参照できるようになった(ハードディスクに直接コピーできる)。しかも、ウィンドウズ版と異なり、少なくともこれらRedon社のCDは、日本語のマックのシステムで問題なく作動する。これ以外で、もし作動しないマック版対応のフランス製のCDがあれば、フランス語マックのOSからパソコンを立ち上げれば問題はないと思う(今のマックでは、昔と違い、正規のOSで同一のハードディスクでの複数のシステムの共存ができやすくなっている)。但し、Redon社の『百科全書』には、頁数と各巻の出版年が載っていない(と思う)ので、論文の註などで百科全書の項目の巻の出版年と頁数を必ず示す習慣のある人にはやや不便に感じるのではないだろうか。また、フルチエールが入っている同じRedon社の辞典集をフランス図書で購入したところ、アクセス番号が欠落していた(書店に問い合わせたところ、アクセス番号を知らせてはくれた)。ともあれ、辞書関係ではおそらくは今でも着々とCD化が進んでいることだろうが、後はベールの『歴史批評辞典』とかトレヴーの辞典とかも(後者は既にCD化されていたかもしれない)やってくれば言うことはあるまい。辞典以外のその他の18世紀の書籍についてのCDについては、筆者には未だに高嶺の花であり続けている。それでも、18世紀の代表的な作家の定評ある全集版のCD化は期待したいところである(ルソーのプレイアド版全集のように、別の出版社からのインデックスが完備されている全集については、筆者はあまりその必要性は感じていないが)。ちなみに、ヴォルテールについては、Voltaire Foundationから刊行中の全集のCD(ウィンドウズ版)が出ており、18学会会員の方にも購入勧誘の手紙が直接送られて来たことであろう。また、Fayardからは、18世紀関係の書籍が割とエントリーしているあの『フランス語哲学叢書』シリーズのCD(ウィンドウズ版)が出ている。これについては、実は筆者の勤務校で18世紀研究以外に携わる教員にも興味を示す方がいたので図書館書籍としてのそのCDの購入を検討したことがある。しかし、幾つかの都合で諦めた。個人で使うならば、狭い日本の住宅事情も考えてみた時、何らかの幸運でお金の工面がつくのならば、電子書籍の方がよいのは言うまでもない。しかし、大学での今後の長きに及ぶであろう公共使用の見地からは、使用できるOSの種類やバージョン及びその更新などを考えてみた時、筆者のような電子機器にずぶの素人にはなかなか積極的な判断が下せないのが実情である。さて、これらの他にも、ルソーら18世紀の著名な人間達やその作品をマルチメディア的に紹介するCDがあり、研究用には使えない代物だろうが、学生の講義用に使うと効果的であると思われる(これらにはたまに日本語マックのOSでは動かないものがある)。

b)ネット上で参照できる18世紀フランス関係の電子書籍については、無料もしくは有料のサイトで参照できるものがある。有料サイトについては余程使用料が安くならない限り、私のような怠惰な研究者は永遠にアクセスすることはないという理由で省略させていただく。さて、純粋な無料サイトについてだが、学生の時分にいた大学で、授業の予習のためにペル

セウス (<http://www.perseus.tufts.edu>) というサイトのギリシャラテン古典関係の部門をたまにはあるが使うことがあった。18世紀研究者でも西洋古典を少しかじる必要が出てきた方ならば、おそらくは必ず参照したことのあるサイトである。西洋古典語のテキストとその語彙チェック機能そして古代ギリシャ語とラテン語の辞書が簡単に参照できるのが非常に有り難かった。これと同じレベルの無料サイトが18世紀フランスのテキストに関してもできれば、言うことはないのだが、残念ながらまだ存在しているとは思われない。但し、結局無料なのかどうかがよく解らないのだが、ヴォルテール協会（日本18世紀学会のリンク集からこの協会の持っているホームページ (<http://www.voltaire.ox.ac.uk>) に簡単にリンクできる）によって現在準備中のElectronic Enlightenment（e-textesのところをクリックしていると出てくる。2003年度は試運転中とのことで、また、参照するにはヴォルテール協会からの許可がいるらしいが、申し込みが簡便にできるように、責任者のe-mailアドレスと申し込用のfax formがホームページ内にある）には興味がわいた。ヴォルテールとルソーの書簡集が電子化されているとのことであり、また収録される18世紀のテキストもフランスに限らず順次拡大されるとのことである。また、無料であるのがよりはっきりしているパリの国立図書館で進めているGallicaというプロジェクト (<http://gallica.bnf.fr>) にも注目した方がよい。残念ながら、筆者が参照しようとした時（9月中旬）は、メンテナンスのため一部使えないところがあるとの掲示があり、事実、辞書と雑誌は全く参照できなかった（単に筆者の電子機器操作の無知のせいかもしれないが、但しGallicaからではなくて、同じ国立図書館のホームページにあるcatalogues et ressources électroniques (<http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/catalog.htm>)のページのperiodiques électroniquesの方から行くと、例えば、『ルソー年報』の画像形式のものを簡単に参照できる）。また、その中のGallica classiqueでは18世紀テキスト（文学もの中心としているがコンディヤックの著作などもある）が数としてそれ程は揃っていないし、クラシックガルニエ叢書などと提携していると謳っている割にディドロやルソーなどさっさとこの叢書からめばしいものを電子化していればいいのにそうならないような状況である。しかし、参照できるとされる辞書には18世紀関係のものが『百科全書』も含めて相当数あるし、雑誌には『ルソー年報』まである豪華さである。また、画像形式にしるテキスト形式にしる、18世紀のテキストが簡単に参照できるのは正直言って嬉しい。更には、テキスト形式のコンディヤックの『人間認識起源論』などが簡単にパソコンにコピーできて、語彙検索できるのは大いに助かる。今後の充実を期待したいところである（画像形式のものは、コピーするのに料金を課せられる方式になっている）。

2、18世紀フランス関係のインターネット上のサイトについて

a) 18世紀研究者用のリンク集について

おそらくは、1(b)で既に触れた18世紀フランスのテキストを電子資料化して参照できるサイトが実は多くの研究者にとって、まずは最も重要とされる第一のものであろう。しかし、それ以前に、18世紀の研究者にそのようなサイトへのアクセスを含めた情報入手の手助けをしてくれるリンク集をもつようなサイトもまた、勝るとも劣らずに重要となる。ところで、電子機器が苦手な外国語能力に長けているわけでもない筆者のような研究者にとって、自宅で電話代をちまちま気にしながら氾濫する外国語のネット情報を探索するのは殆ど拷問に等しい。そこで、こんな筆者にとって簡便に情報を集める有力な手段となるのは、当然ながらインターネット上の日本語リンク集である。

まずは、日本18世紀学会のホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs>) にあるリンク

集は思いの外に便利である。確かに、フランス18世紀学会とヴォルテール協会しか載せていないが、これら二つ（特にフランス18世紀学会のホームページのリンク集）を辿っていただくだけでも芋蔓式にかなりの数と種類の18世紀フランス関係のサイトが見つかるだろう。

また、もう少し網羅的なものとしては、名古屋大学の飯野和夫氏

(<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ino>)のホームページの18世紀フランス関係のリンク集は極めて便利である。また、そのリンク集以外でも彼による「インターネットによるフランス研究」のページでは、様々な電子情報関係の親切な入門情報があり、私のような初心者には非常に助かる。但し、このリンク集が作られてから割と年数が経っているせいか、ここからアクセスしようとしてもアドレスが変わったもしくは消滅したものが幾つかある。外国語のものでは、飯野氏のリンク集に紹介されている、Eighteenth-Century Resourcesというホームページ(<http://www.andromeda.rutgers.edu/~jlynch/18th>)が簡便な解説(英語)が付いておりなかなか使いやすそうである(但しイギリス18世紀が中心)。

b) 書誌情報のサイトについて

手許に現物がたまたまない本の書誌情報を調べる必要が出てきた場合、もしくはある分野やある作家の研究書などの大体の出版状況を大雑把ながらも調べる場合には、パリの国立図書館のサイトで簡単に見れるカタログ(BN-OPALE PLUS (<http://www.bnf.fr/pages/zNavigat/frame/catalog.htm>))が便利のように思える。特にパリの国立図書館のカタログは、1970年代以前の書籍についてもほぼ調べられるようになっている。膨大な巻数からなる昔の紙のカタログ(CD版があったはずだし、日本の国会図書館にもあった気がする)の方が使い勝手は良かったしまたいずれにせ網羅的な書誌情報ではないが、日本にあるNacsis websiteと同様に、自宅のパソコンから無料で調べられるのは嬉しい。

c) 書籍購入のサイト

ある西洋古典関係の学者の方で、インターネットで最大の恩恵を得たのは古本屋ではないか、と言っていた人がいた。無論、そこで彼が念頭に置いていたのは、フランス文学研究者の鹿島茂氏のような人が購入される高価な西洋の古書を扱う古書店である。残念ながら筆者にはそんなものを買う根性はないが、それらの古本専門のサイトを試しに覗いてみると、確かにこれが手元に置けたらなぁと淡い思いにさせるものがかかり見つかる。しかし、仮にそうでなくとも、割と最近に絶版されたそれ程目が飛び出るほどに高価でない古本の研究書を買うには絶対に便利である。買ってみなければ中身が解らない新刊の研究書と違い、古本の研究書は評価がある程度定まっているために、書店で直接現物のページをめくる必要が少ないという事情も、古本のインターネット書店に有利に働こう。さて、貴重本そして研究書の古本を含め、実際にどの古本サイトを使うかという段になると、正直言って迷ってしまう。事実、Yahoo Franceなどでフランスの古書店について検索すると膨大な量の検索結果が出てくる。そんな時はやはりこの方面のリンク集が便利である。例えば、Aazbooks.comのもの(<http://www.aazbooks.com/fr/liens.php>)などが簡便なような気がする。また、このAazbooks.comリンク集には載っていないが、BookFinder.comのフランス版、BookFinder.com French(<http://www.bookfinder.com/french>)は、Abebooksなどとも提携していて割と便利である。勿論、18世紀フランスに関する英語の研究書籍を探すなら、BookFinder.com(<http://www.bookfinder.com>)やその他の英語圏の古本サイトを見るべきであろう。同じく、ドイツ語の研究書ならドイツ語圏の古本サイトを見ることにもなるだろう。ともかく、多くがフナックやフランス・アマゾンの新刊購入の場合と同様、(加入している古書店の事情差はあるだろうが、)簡単にそして割とすぐに書籍を手に入れることが出来る(少なくともフ

ランス図書などの日本の洋書専門店を介してフランスに注文を出すよりは早いであろう)。

以上、分不相応な身ながら長々と書き連ねてしまったことをご容赦願いたい。おそらくはこちらの不勉強ゆえに不正確な情報を示してしまっていることと思う。ただ、にわか勉強ながら筆者にも、18世紀フランス研究にとってもまたこれらの電子資料・情報の存在は極めて魅力的であることは痛感できた。しかしまた、余りに膨大な情報の山に埋もれがちなこの分野にあっては、むしろこれらの煩瑣な情報への道標を同じ分野の研究者の間で共有する努力の必要があることも事実であろう。この不慣れな記事が、今後本格化するであろうこの方面での18世紀フランス研究者の間での情報共有のささやかな呼び水になることを願いたい。

事務局より

学会会議について

今期学会会議にも、前期に引き続き、登録が認められ、語学・文学部会に属することとなりました。学会会議役員を選出については、本学会としては、鷲見洋一会員を推薦いたしました。が、選出されませんでした。

学会会議の今後のあり方については緊迫した議論が進行中ですが、大会の折りにも報告いたしました。が、本学会としても、役員候補者選出の方法など、学会会議参加について様々な議論を進めていく必要があります。

第25回大会について

青山学院大学(東京)において、2003年6月21日(土)、22日(日)に開かれました。開催校責任者の植田祐次会員には、同時に共通論題「自由人、その生のスタイル」のコーディネーターもお願いしました。詳細は、来年度の年報にお知らせいたします。

第26回大会について

来年度の大会は、2004年6月12日(土)、13日(日)に、南山大学(名古屋)で開かれる予定です。開催校責任者は、中矢俊博会員です。共通論題、および自由論題の公募は、次号の学会ニュースにおいてお知らせいたします。公募締め切りは3月中旬を予定しております。

事務局の移動について

代表幹事が安藤隆穂幹事から佐々木健一幹事に代わりました。それに伴い、事務局が移転いたしました。新連絡先は以下のとおりです。

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

日本18世紀学会事務局

常駐の事務員はおりませんので、ご連絡は郵便あるいはメールにてお願いいたします(郵便物およびメールは1週間に1度確認いたします)。メールアドレスは

voltaire18th@yahoo.co.jp

です。

なお、事務局移動に伴い振替口座も変更いたしました。会費未納入の方には新しい振り込

み用紙を同封しておりますので、こちらをお使いください(データは9月中旬のものに基づいておりますので、行き違いですでお振り込みの場合は、ご容赦ください)。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

毎回、入会申込用紙を同封しております。国際学会名簿のための資料として、欧文の記載もお願いいたします。これはすでに会員になっておられる方に再提出を求めているわけではなく、新会員の勧誘にご協力いただくためのものですので、コピーするなどしてよろしくお願いたします。

現幹事会メンバー：安藤隆穂、安西信一(補充幹事：常任幹事)、井田尚(補充幹事：常任幹事)、小田部胤久(常任幹事：会計担当)、川島慶子、木村三郎(補充幹事：常任幹事)、近藤和彦(補充幹事：常任幹事)、坂本達哉(常任幹事)、佐々木健一(代表幹事)、高橋博巳、寺田元一、長尾伸一、堀田誠三、増田真(常任幹事：国際幹事)、渡辺浩(補充幹事：常任幹事)
会計監査：中島ひかる 森村敏己

日本18世紀学会ニュース 第43号 2003年10月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 佐々木 健一

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室

e-mail: voltaire18th@yahoo.co.jp

fax: 03-5841-8958